

勝林寺寺報

アジヤセ太子

如来さまの「お救い」のまさしき対象（眞実の機）。それが阿闍世太子という人物です。

『觀無量寿經』や『涅槃經』などに描かれている釈迦在世中に「王舍城」におけた悲劇の中心人物です。

お釈迦さまがご存命のころインド北部にあつたビンビサラ王。イダイケ王妃が統治するマカダ国、その王子の王城で起きたなまなましい悲劇です。

世継ぎの王子に恵まれなかつた王様は思案あまつて森の中に修行していたアシダ仙人に占つてもらつてようやく一子を得ました。この秘密が世間に知れることおそれてその仙人を殺害処分してしまいました。また王妃は出産の折りに、高いところから産み落として、顔を見ない間に消し去ろうとしたのです。が幸いにこの子は手の指を傷つけただけで丈夫に育ちました。しかし、だれいうとなく生まれた王子を「未生怨」言って噂しました。成人した王子は、お釈迦さまの親族にあたる提婆難陀タバタッタという人物に陵(陵辱)され成り、王を七重の牢獄に入れ殺そうとしました。王妃イダイケは自分の犯した罪を悔いながら、しかし密かに王に食料を送りつけました。

牢獄の守衛からそれを聞いたアジヤセ太子は「我が母もこれ賊」と叫んで母を別の牢屋に幽閉しました。身の命運と罪業とを悲嘆した王妃は、遙かに見えるギシャクセンの寺にお

わすお釈迦さまを仰ぎ泣き絶るしかありません。お釈迦さまは、王妃の苦悩を思いやり、阿難・田蓮というお弟子を従え牢屋の内にあらわれた。夫人は我が身の不運を嘆

き悲しむなかで、私のような罪業まみれの者の救われる法途ありやと嘆き訴えます。それに答えての説法。

王位を守るためとはいえ仙人を利用しそのうえ殺害してしまった親。そのうえ自らの子供を殺そうとした親。

國と王位を守るため、わが子を敵と憎むそしてわが運命から逃れる道を必死で求めます。

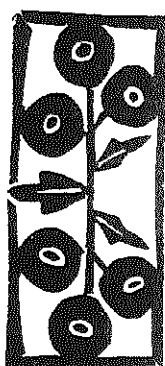
また、其の親を「わが賊」とよんで王位を奪おうとする王子。

昔話・人事ではなくこれら人間模様を現代のわたしの日常の暮らしや心のなかにないのであるうか、自省してみます。

自分に都合のいいように自他を歎き（合理化）ながら自他を「まかし歎いてくらしているのではないかとわたしは思うのです。

親鸞さまの書きのこされたお書物や、先程らい見て来た『涅槃經』・『觀無量壽經』などのおしえのなかから伺つてみようと思います。

(前住職)



葬儀

五月十四日

正法寺 山田清務様 八十七歳

得度披露ご挨拶

六月 勝林寺 予定

謹んで、勝林寺本堂のご本尊 阿弥陀如来様 またご門徒の皆様にご報告申しあげます

この度 平成二十六年五月十五日

御本山本願寺の御影堂 宗祖親鸞聖人の御前におきまして 得度の式を受け 淨土真宗本願寺派の僧侶となりました

ここまでお育ていただいたご縁に あらためて感謝申し上げます

一五日 (日) 田村春男宅 一周忌

一五日 (日) 山田晴彦宅 忌明

湯口孝春宅 一七回忌

一八日 (水) 伊藤昭一宅 三回忌

一九日 (木) 西方寺 永代経

二〇日 (金) 福成寺 永代経

二一日 (土) 納骨研修旅行

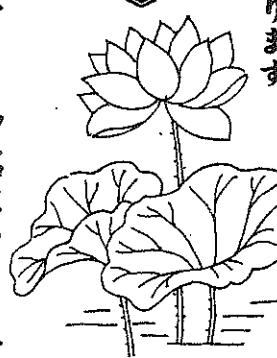
二二日 (日) 納骨研修旅行

二六日 (木) みのりを聞く会

二七日 (金) 出石但東仏教会 総会

二八日 (土) おみがき奉仕作業

二九日 (日) 連研 (研修旅行)



わたしは
『わたしの約束』

終身学び続ける 僧侶になります

私は、人の話をじっくり聞きます

私は、常にわが身をふりかえります

私は、人のために尽します

平成二十六年五月十五日

勝林寺 衆徒 釋深往 (西池美幸)

勝林寺ネット

齊藤 保さん オメでとう

五月二十六・二十七日に、出石組念

仏奉仕団として本山に上山いたしました。勝林寺からは、十五名の方が参加されました。その中で、小田の齊藤保さんは、二十五回目の参加となり、本願寺より表彰を受けられました。

お念佛の正機 (しょうき)

正機 (じょき) の「機」というのはハズミ。「縁」によってその好みで如何様にも変わつてうごくもの。学問では「機発 (まき) の義」といつたりしますが要するに、ここでは単純に、機とは、わたしたちほとけさまのお救いの対象となるものと考えてよいと思います。私たち衆生です。わたしたち衆生には、いろいろな型があります。それを「王舍城物語り」のなかに見て行きたいと思ひます。

まず、仏教でも、どうしても救うことの出来ない者（「難治の三機」といいます）として、五逆罪・謗法罪・そして「一栴提」（栴陀羅・イッヂエンダラ）を挙げます。内、栴提は、インドの四姓制度からも除外される最低階級の人たちをいますが、ここでは内容的に、人としての悩み・憂いなど全くない一生ノホホンとしてくらす刹那刹那の快樂だけを追い求めているような人のことを指します。

どのお経にも、このセンドダイは救いから除外しているのに、親鸞様は『教行信証』のまとめ「總序」の中で、如来さまのお慈悲は、この「逆法・栴提」をこそ救うためにコソはたらいてくださるのだと強調なさっています。ここが親鸞様の教える核心とみていいと思います。

その日その時間さえ楽しく過ごしていればそのほかのことはどうでもいいと遊びほうける子供を、追いかけるように保育する母親の厚いすがたを想ひます。

ヤンチャな幼かっただわたしを、繼子いじめと周囲の人達から見られるなかで、お仏壇の前で、「カアチヤン、そんなにするんやったら、もう、カアチヤンやめて、お里へ帰らなあかん」とわたしを抱きすくめた義母の「さまあまな機のあるなかで、最も親から遠いところにいる人間をこそと、はたらいてくださるのが眞実の如来様と親鸞さまは戴かれたのです。

この栴提をはじめとして、ようやく自分の犯した罪の報いに恐れ戦く太子。この痛みから熱病になり身に熱の花を咲かせ苦しみ、なおも其の上におれを必死に正当化・合理化しようともがく機（人間）の典型を、涅槃経は六人の大臣の進言としてえがいています。

罪を犯したもののが自己弁護とみていいでしょう。

1、刀で親を殺した場合、それはあなたの罪ではない。ころしたのは刀なんだから。

2、カララ虫は親の腹を食い破って産まれてくる。そして親を食料にしてはじめて成虫に育つ。生き物の運命で仕方ないことです。（以下略）

如何に、へ理屈づけて罪を合理化しようと外しているのに、親鸞様は『教行信証』のまとめ「總序」の中で、如来さまのお慈悲は、この「逆法・栴提」をこそ救うためにコソはたらいてくださるのだと強調なさっています。ここが親鸞様の教える核心とみていいと思います。

その日その時間さえ楽しく過ごしていればそのほかのことはどうでもいいと遊びほうける子供を、追いかけるように保育する母親の厚いすがたを想ひます。

その日その時間さえ楽しく過ごしていればそのほかのことはどうでもいいと遊びほうける子供を、追いかけるように保育する母親の厚いすがたを想ひます。

（前住職）

釈迦・弥陀は慈悲の父母（ごみつ）種々に善巧（ぜきょう）方便（ほうべん）わからが無上の信心を發起（はつき）せしめたまひける

『高僧和讃』

法語カレンダー六月（HPより抜粋）

深い悲しみ

苦しみを通じてみる世界がある



どすん

四年前に、得度をすると決めました。三年間通信課程で学びました。そして、得度習礼を無事に終えた。僧侶となさせていただきました。

事ですが、私を大きく変えました。あなたたちは、得度させていただくということを何か資格でも取りに来ているように誤解していました。【えつ？違うの？】各家庭の報恩講にお参りして、おうちの方の様子やペシトのことを報告してくれる住職を見て、「私もお参りしていく」姿を手紙の形でつづられたもので、通して彼女が「人として育てられている尊さを知っていく」姿を手紙の形でつづられたもので、三人の子どもたちへの遺言でもあります。（中略）

平野恵子「子どもたちよりありがとうございます」より

平野さんは、飛騨高山にある浄土真宗の寺院の坊守でした。三十九歳の時、正月の御荘嚴をしていました。腎臓がんでした。

その後二年の闘病生活のち往生されました。

この本は、その二年間において、子どもたちを通じて彼女が「人として育てられている尊さを知っていく」姿を手紙の形でつづられたもので、三人の子どもたちへの遺言でもあります。（中略）

その一部を引用します。

「・・略・・こんな病気のお母さんが、あなた達にしてあげられること、それは、死の直前まで『お母さん』でいることです。元気でいられることは、あなたたちが、今までの自分を捨てて、普通のお母さんでいること、徐々に動けなくなつたら、素直に、動けないから頼むこと、そして、苦しい時は、ありのまま苦しむこと、それがお母さんにできる精一杯の事なのです。そして、死は、多分、それがお母さんからの最後の贈り物になるはずです。」

『母親』でいることではなく、『お母さん』でいること』とあります。子どもたちに対しても、自分が自ら考える母親像ではなく、子どもたちの口にのぼる「お母さん」なのです。つまり、

『母親』でいること』ではなく、『お母さん』でいること』とあります。子どもたちに対して、死は、多分、それがお母さんからの最後の贈り物になるはずです。

指導官の言葉は続きます。「得度する」とは、あなたたちが、今までの自分を捨てて、普通のお母さんでいること、徐々に動けなくなつたら、素直に、動けないから頼むこと、そして、苦しい時は、ありのまま苦しむこと、それがお母さんにできる精一杯の事なのです。そして、死は、多分、それがお母さんからの最後の贈り物になるはずです。

指導官の言葉は続きます。「得度する」とは、あなたたちが、今までの自分を捨てて、普通のお母さんでいること、徐々に動けなくなつたら、素直に、動けないから頼むこと、そして、苦しい時は、ありのまま苦しむこと、それがお母さんにできる精一杯の事なのです。そして、死は、多分、それがお母さんからの最後の贈り物になるはずです。

「えつ、そうなの？自分を捨てる？」――それだけの覚悟をもつていなかつた私でしたから、この言葉に心がぐらりとしました。が、家族やご門徒の皆さんへの期待を思うと、ここでやめるわけにはいきません。それに、学べば学ぶほど

に、こんな私が僧侶にしていただけるということだが、とてももつたいたなく、ありがたいことだ

これが自ら考える母親像ではなく、子どもたちの口にのぼる「お母さん」と呼ばしめる、

そこにこそ、彼女自身の「親」の名告（なの）りがあつたのでしょうか。「南無阿弥陀仏」の名号は「親の喚び声」といわれます。その名を喚ぶこと（称名）を通して、悲しみや苦しみの多い人生の中で、いのちを育む願いや働きを知らされ感謝する日暮しこそが、「人として育てられる」なのだと思います。（笑）

外見的には、少し痩せたことぐらいしか変化

しない私ですが、内面的には、自分に厳しく生

まれ変わらせていただいた私です。（文責坊守）